

桂林莊雜詠諸生示す(その一)

広瀬淡窓

道休他郷苦辛多しと

同袍友有り自相親しむ

柴扉曉出れば霜雪の如し

君は川流を汲め我は薪を拾ふ

【作者】広瀬淡窓(一七八二〜一八五六年)(天明二年〜安政三年)。江戸後期の折衷学派の儒者。名は建。字は子基。淡窓は号。別号に青溪、蒼陽など。豊後日田の人。父は諸藩の御用達商人。徂徠学派の亀井南冥に学び、実家を弟に譲つて、文化四年(一八〇七年)書塾瓊林莊(桂林莊?)を開き、一八一七年日田郡堀田村にこれに移し、咸宜園(かんぎえん)と号して子弟を教育。塾生は四千人にのぼった。

【語釈】*桂林莊雜詠示諸生：作者私塾である桂林莊で、いろいろな事物を詠んだ詩を作つて、学生諸君に示す。*桂林莊：広瀬淡窓が日田に開いた私塾の名。瓊林莊。咸宜園の前身。*雜詠：いろいろな事物や季節を詠んだ詩歌。特に決められた題によらないで詠んだ詩歌。*示：詩を作つて、目下の者に示す。*諸生：諸学生。学生諸君。各書生。諸君。*柴扉：しばで造つたとびら。しばで造つた開き戸。

【通釈】よその土地では苦勞が多い、と言いなさるな。衣服を共用にする仲間があり、自然と親しみを深められているではないか。明け方に、柴で造つた戸を開けて外へ出てみれば、霜が雪のように降りているではないか。君は川で水を汲みたまえ。わたしは薪(まき)を拾うことしよう。